

中井久夫先生の手紙

村田 奈々子

東洋大学文学部史学科教授

中井久夫先生とのご縁はギリシアへの関心と興味、この一点につきる。ただし興味を持つ方向は先生と違っていた。先生は、近代ギリシア世界を代表する詩人コンスタンディノス・カヴァフィスをはじめ、近現代のギリシア詩人の作品に惹かれ、熱心にその翻訳に取り組まれた。私は、近現代ギリシアの歴史に興味を抱き、これまで研究をつづけている。先生が医師という本業のかたわら、ギリシア文化の領域に足を踏み入れることがなければ、私は先生のお名前に触れることすらなかったかも知れない。

私は中井先生に実際にお会いしたことはない。だが、訃報に接した時、にわかによみがえった記憶がある。私は、たった一度きりではあるが、先生と手紙のやり取りをしたことがある。もうずいぶん前のことで、残念ながら先生からのお手紙は今も探しだせずにいる。ただしその内容は、今もよく記憶している。

私は大学院在学中、十九世紀のディアスポラのギリシア人に興味を持った時期がある。エジプトのアレクサンドリアにあったギリシア人コミュニティのことを調べ、その時カヴァフィスに出会った。カヴァフィスの詩が日本語に訳されていることを知った私は、早速中井先生の訳書を手にとり、ギリシア語の原文と突きあわせながら、一つひとつ読んでいった。ギリシア語を読むのにとっても苦労していた当時の私にとって、歴史書よりはるかに難解なギリシア語の詩のことが、その深く意味するところまで日本語に移されているのは、大きな驚きだった。まだ若い私には、先生のすぐれたギリシア語力がうらやましかった。しかも訳者である先生は、ギリシア文学の専門家ではなく、医師であるという。これにはさらに驚かされた。

今振り返ると、恥ずかしくもあり、無礼なことだったと思う。私は先生にお手紙を差し上げようと思い立ち、自己紹介をした上で、無邪気に自分の気持ちをそのままに書いた。見ず知らずの一大学院生からの手紙を、先生はどう思われたことだろう。間もなく先生からのお返事が届いた。とても丁寧なお手紙で、ギリシア語学習と近現代ギリシア史研究に対し、励ましの言葉をいただいた。

中井先生とやりとりがあったのは、この一度きりである。その後私は、迂闊に

も先生のお手紙のことをすっかり忘れていた。それでも、留学先のニューヨークやアテネで参加したカヴァフィスの詩の朗読会や、ギリシア人との会話の中でカヴァフィスの名前が出るたびに、先生のお名前が脳裏に浮かんだ。

先生からお手紙をいただいて、およそ三十年の歳月が流れている。私は相変わらずギリシア語を読むのに苦労しながら、近現代ギリシア史の研究を続けている。私のこれまでの研究生生活は多くの人々に支えられてきた。記憶の奥底に眠っていたものの、先生からの励ましは、今も私を支えてくれている。遅きに失してしまったが、先生にはあらためて感謝申し上げたい。

これまでギリシア本土の各地や、エーゲ海の島々を数多く旅した。けれど、イタカにはまだ足を延ばすことができずにいる。カヴァフィスは、旅の「終着目標はイタカだ」と言う。中井先生は、人生の旅を終えられて、今、イタカで心安らかに眠っておられるだろうか。未熟な私は、これからもしばらく旅を続けたいと思っている。そして、いつの日かイタカの地に立ちたいと願う。そのとき、ふたたび先生が訳された詩句を思い起こし、私自身の人生の意味をかみしめることができればと思う。

イタカが貧しい土地でも
イタカが君をだましたことにはならない。
きみは経験をうんと仕込んで
旅の終わりには賢者になるだろう。
その時にはイタカの意味がわかる。
おのおのにとってのイタカの意味がな。
(カヴァフィス「イタカ」〔中井久夫訳〕より)

【編集委員会より】

村田奈々子氏：1997年～2010年まで本会の会員。

「私とギリシア語のおつきあいのしかた」『プロピレア』第9号、43-48頁、1997年。

「10250語でギリシア語が話せるの？ 会話帳づくりの裏側」『プロピレア』第10号（創刊十周年記念特集「ギリシア語を学ぶ」）、42-44頁、1998年。